

## 【意思決定支援】

社会の中で子どもと大人の最大の違いは、自分の行動に対する責任能力にあるといえます。子どもは自分の行為に対して責任を取ることはまだできません。経験不足により未来予測も判断能力も不十分です。経済的にも自立していません。だから子供を育てる人は、子どもが何かをするとき、子どもの年齢や能力に応じてアドバイスしたり、手助けしたりする責任・権利・義務があるのです。

子どもが 18 歳に達したら親権は消滅します。周りからアドバイスを受けながら経験を積み、自分の行為に対する責任が取れる大人に成長していきます。

時が過ぎ認知症を発症すると、今度は徐々にまた責任能力が低下します。認知症初期の頃はまだ良いのですが、記憶障害により新たに覚えることができないため、約束を守ることが難しくなります。様々な側面から現実検討能力が障害され、本人にとって不利益な判断をしてしまうこと、さらにそれを押し通そうとすることもあります。誰だって自分ができなくなってきたことを認めたくはないですし(否認)、自分を客観的に見つめること(自己客観視)ができず本当に気づいていない場合もありますが、自己評価と他者評価に解離が生じます。

認知症を支える人は、本人にとっての最大の利益と、本人が認知症になっ  
ていなければ何を望んでいたかを考えながら、想像力を働かせて本人に成り代わ  
って決める手助けをする必要があります。日常臨床の中でこうした意思決定支  
援が必要な場面は多々あります。『本人がそう言っているから』という理由だけ  
で、認知症になった人の要望をそのまま聞き入れることは、責任能力を持たな  
い子どものわがままをそのまま聞き入れることと同じです。